

タイトル名「対人援助実践をリポートするこの一冊」

第35回：第4章-その7-

## 対人援助領域における虫瞰と鳥瞰， あるいは，仰望と俯瞰

著：渡辺修宏  
企画：渡辺修宏  
小幡知史  
二階堂哲

### 「外の世界」から「今の世界」を知る

前回述べた通り（第33回：第4章-その5- 車椅子の少女が命を懸けた物語に教えられたこと，対人援助学マガジン第63号，238ページ～ <https://humanservices.jp/wp-content/uploads/magazine/vol63/38.pdf>），私は息子とのかかわりを契機に，野球の本ないし，野球選手らの本を手取るようになった。

前回の記事において，40冊弱の野球関連本を軽く紹介させていただいたが，...その手の本の読書は，今も続いている。野村克也著作は相変わらずだが，それを含めて他にも，以下の文献を手取っている。

- 野村 克也 「そなえ 35歳までに学んでおくべきこと」  
「野村克也野球論集成」  
「野村のDNA 頭脳野球とは何か」  
「ありがとうを言えなくて」  
「野村の真髄 「本当の才能」の引き出し方」  
「野村の実践「論語」」  
「弱い男」  
「人生を勝利に導く金言」  
「私が野球から学んだ人生で最も大切な101のこと」  
「なんにもできない夫が，妻を亡くしたら」
- 栗山 秀樹 「栗山英樹の思考」  
「信じ切る力 生き方で運をコントロールする50の心がけ」  
「伝える。言葉より強い武器はない」

- 仁志 敏久 「仁志敏久の超守備論」
- 工藤 公康 「折れない心を支える言葉」
- 松井 秀喜 「告白」  
「エキストラ・イニングス 僕の野球論」
- 井口 資仁 「もう下剋上とは言わせない ～勝利へ導くチーム改革～」
- 張本 勲 「イチロー論 一流とはなにかプロフェッショナルとはなにか」
- 工藤 公康 「折れない心を支える言葉」
- 王 貞治 「チャレンジが道をひらく 野球この素晴らしきもの」
- 鶴岡 慎也 「超一流の思考術 侍ジャパンはなぜ世界一になれたのか？」
- 大塚 光二 「基本と実践で差がつく！外野手最強バイブル」
- 長谷川滋利 「適者生存 メジャーへの挑戦」  
「メジャーリーグで覚えた僕の英語勉強法」  
「私が見た大谷翔平とメジャー新時代」
- 和田 毅 「だから僕は練習する 天才たちに近づく挑戦」
- 高津 臣吾 「理想の職場マネジメント 一軍監督の仕事」
- 桑田 真澄 「スポーツの品格」
- 白井 一幸 「北海道日本ハムファイターズ流 一流の組織であり続ける3つの原則」
- 児玉 光雄 「イチロー流「最善主義」で夢を叶える」
- 白鳥 早奈英 「野球で勝つ食事！」
- 小倉 全由 「一生懸命の教え方」
- 桑原 晃弥 「大谷翔平は、こう考える 不可能を現実に変える90の言葉」  
ディラン・ヘルナンデス, サム・ブラム, 志村朋哉  
「米番記者が見た大谷翔平 メジャー史上最高選手の実像」
- 中島 大輔 「山本由伸 常識を変える投球術」
- お股ニキ 「セイバーメトリクスの落とし穴 マネー・ボールを超える野球論」  
「なぜ日本人メジャーリーガーにはパ出身者が多いのか」
- 加藤 弘士 「砂まみれの名将 野村克也の1140日」  
「慶應高校野球部「まかせる力」が人を育てる」
- 木場 克己 「続ける技術, 続けさせる技術」
- 鈴木 忠平 「嫌われた監督 落合博満は中日をどう変えたのか」
- 木村 由美子 「一生懸命 木村拓哉 決してあなたを忘れない」

その他、タイムリー編集部「甲子園を目指せ！進学校野球部の奮闘の軌跡」、ベースボールマガジン社編集の「左バッターを科学する」と「松井秀喜の言葉力」、鉄人研究会の「アニキの名言」、水谷隼の「打ち返す力 最強のメンタルを手に入れろ」、新潟リハビリテーション病院の「16歳までの野球教本」、ルイス・ミゲル・ペレイラ、ファン・イグ

ナシオ・ガジャルドの「クリスティアーノ・ロナウドの 心と体をどう磨く？」など読んでいる。

繰り返しになるが、野球部出身でもない、まして、野球ファンでもない(?) 私が、このように野球関連の本を読むようになったのは、学童野球、中学硬式野球に挑戦した息子の応援のためである。

野球のルールを知って、息子の野球技術のレベルアップをちょっとだけ手伝っていかねばならない、という、一種の責務感があったからだ。もしかしたらそれは、焦りや強迫観念に近かったかもしれない。

なにしろ、(小学生の学童野球はともかく) 中学硬式野球が明確な競争社会であったからだ。これは後から、つまり息子が硬式野球チームに入った後に知ったことなのだが、部活ではないクラブチームにはある種の教育的配慮はなく、極端に言えば、勝つために選手が起用されるだけでなのである。

もっとも、これは考えてみれば、至極当然なことだろう。義務教育機関である中学の部活動としての野球を犠牲にして(学外のクラブチームと同時参加ができないので)、入会に伴う初期費用、毎月の会費、父母会費、リーグ登録費、保険料、遠征費などを負担し、かつ、学区外の練習場に毎回車で送り迎えし、県内外遠征になれば場合によっては宿泊が伴うのが、硬式野球クラブチームなのである。ほとんどの選手やその保護者らが、野球に対し、いわゆる「本気モード」で参加しているのである。目指すは全国大会出場、いつかは「全国制覇」、...それが指導者や選手たちの頭のどこかに、いつも秘められているのである。

こういった、クラブチームでの活躍次第によって、高校からスカウトを受けて進学するケースも少なくないし、また、甲子園出場選手、大学野球選手、社会人野球選手、そしてプロ野球選手の多くは、こういった硬式野球クラブチーム出身者である。ご多忙にもれず、息子の同級生たちの何名もが、県内外の有名高校からスカウトされて、進学先を決めていた。息子の先輩たちの何名かはすでに、甲子園に出場し、若干名は、有名大学野球部、社会人野球部、そしてプロ野球の世界に巣立っている。...本当に、すごい世界である。ただただ、そう感じる。

ええ、そんな、「野球界では極めて常識的なこと」を、まったく知らなかったのが、ど素人の私であった。私と家内と息子は、そんな当たり前にことを、まったく知らずして、クラブチームに入ってしまったのである。それがゆえ、「ああ、野球好きなんですね」の一言で済まないくらい、周りの方々が「野球ファースト」でいることにひどくびっくりしたのが、息子が入団した頃の、私の正直な想いであった。

野球に必要なとあれば、(あまり) お金に糸目をつけず、時間も割いて、家族総出で、御子息ご令嬢のサポートに勤しむ。尊敬も込めて、「ドン引き」するに近いくらい、とにかくすごいと感じたのであった。

失笑を買う覚悟で告白するが、子どもに野球をさせるとなれば、「それなりの車が1台買えちゃうくらい」の予算を必要とすることを、私はまったく知らなかったのである。グローブ1つに5万円ぐらいかかったぐらいで、「なかなかの費用だなあ」と思っていたら、周囲の保護者の多くは、「10万ぐらいかかえなきゃいいグローブとはいえない」とか、「外野用、内野用、一塁手用、投手用、捕手用グローブ。…指導者がそのポジションを子どもにやらせてくれるなら、すべてのグローブを用意させなきゃ。ま、普通、20万ぐらいは覚悟しないとね」と語っていた。「野球の用具なんてバットとグローブでしょ」なんて発想しなかった私は、完全に無知蒙昧である。専用バックとか、専用パーカーとか、専用ウィンドブレーカーとか、専用Tシャツだとか、何種類かの帽子だとか、ストッキングとか、アップシューズとか、スパイクとか、バッティンググローブとか、メンテナスグッズだとか、とにかく覚えきれないくらいの用具が必要なのである。この時点でもうすでに安い車を買えるぐらいだが、さらに遠征費だとか、オリジナルグッズだとか、際限なく延々に必要経費が降り掛かってくるのである。大会に出場すれば記念クッキーって…そんなものまであるなんて、本当に予想だにしていなかった。

…最初に知りたかった（笑）。

子どものために、自宅を改修して「練習場」を用意する家庭が、きわめて普通のコミュニティの中で、私と息子は浮いていた。頻繁にバッティングセンターに通うから、回数券とか、サブスクリプションを利用するのが日常という世界が、そこにはあったのだ。まさに、野球音痴の私とは、住む世界が違う。そんなわけで私は、心の奥そこで感じた、「なんでそんなに野球が大事なんだ・・・？」という疑問を、聞きたくても口に出せずに、今日までやってきたのであった。

さて、私といえば、息子に対して別に「野球で身を立てよ」と願っていたわけではないし、また、息子も早々に、「…自分には、プロ野球選手は無理だなあ」と気づいたので、あきらかに周囲の勢いにはついていけない、ついていけない親子となってしまうていた。そして実際、息子は同期の中で、一番下、あるいはその辺りをウロウロするような野球レベルであった。つまり、明らかな補欠候補。いや、誰がどうみても、ベンチ要員確定であった。

ベンチ要員を否定する気は毛頭ない。チームの一員として、やるべきことはいくらでもあるし、掛け替えのない役割を果たす立場である。しかし、だからといって、わりきって野球をやればいい、と、達観したわけではなかった。

息子が野球をやると決めたからには、やっぱり意味のある経験を積んでほしい。人間的に成長してほしい、中途半端にやめてほしくない願うのが、私の本心であった。そしてそのためには、息子の野球スキルの成長を後押しすることが不可避になるのであった。よって、先に述べた通り、「野球を学んで、息子の野球技術のレベルアップを手伝わねばならない」と、ある種の戦慄を抱いたのであった。そう、それが野球関連本をむさぼるようになったきっかけだったのである。

幸い、息子は、そこそこ試合にださせてもらえるプレーヤーとなった。

上達したから、というより、チーム事情によるところが大きい。

と、いうのも、ケガや病気でチームを退団する者、他のスポーツ競技に鞍替えする者が続いたからである。そして、試合にださせてもらえれば、それなりに指導者に目をかけてもらえて、それなりに育ててもらえたのである。

そしておかげさまで、先日無事、息子は中学硬式野球をやり終えた。3年間にわたる期間において、茨城、千葉、栃木、群馬、東京、埼玉、福島、神奈川、兵庫、岡山など多くの地域で、延べ100試合以上の経験値をつむことができた。ありがたい限りである。

ちなみ私は、チームの記録係として、延べ300試合ほどの試合記録をまとめた。おかげでなんとか、スコアがそこそこ読めるようになったのである。1700を超える野球ルールを覚えきことはなかったが、「インフィールドフライ」や「フィルダースチョイス」、そして、「インターフェア」という概念を理解したのである。そして、「塁審」と「主審」もできるまでとなった。我ながらびっくりである。

まもなく息子は高校に進学し、今度は高校野球に挑むようだが、さすがにある程度野球を学んだためか（そして、身の程、身の丈を知ったためか）、プロ野球、社会人野球、大学野球には興味を示さず、「高校野球が最後の野球」と明言している。

そんなわけで、正直なところ、もう私は、野球関連本を読むべき当初の目的を失ってしまった。しかしまだ、私はこの手の本を手にするのである。なぜならば、それ相応に読んでいくうちに、気づいたからである。野球関連本から多くの学びを得れるということ。

野球は時に、野球道とか球道と呼称される。

その名が意味する通り、技術の上達を通して心身を鍛錬させ、人間形成を目指すのが野球なのである。己と向き合って、かつ、己以外とかかわって、真摯に己を掘り下げるのである。

このように野球をとらえると、人とはなにか、人生とはなにか、なぜ人は生きるのか、なぜ人は野球をするのか、という問いに対する答えを見出すため、ひたすら精神世界と現実世界を行き来することとなる。その時、野球を通じて、いろいろな学びを得れるのである。

そのことに気付くと、ヒューマンサービスの世界に身を置いて、ヒューマンサービスにかかわる専門書ばかり手に取ってはなかなか気づけないことを、野球関連本は教えてくれたりするのである。そしてその時私は、「今いる世界」を、「外の世界」からみることの大事さに気付くのである。まるで、虫瞰（ちゅうかん）から鳥俯（ちょうかん）に切り替わったような感覚とっていいだろう。

本原稿のタイトルで用いた虫瞰とは、「虫の視点から、近くの局所的な物事をみること」である。同義語とである仰望（ぎょうぼう）とは、「下から上を仰ぎ見ること」である。そして、それらの対義語となる鳥瞰、または俯瞰（ふかん）は「高い所から見おろし

眺めること。転じて、全体を大きく眺め渡すこと」を意味する。

これらは、(ひとによっては)あまり日常では使わない、使われない言葉かもしれない。少なくとも私は、「俯瞰」以外、日常生活でほぼ使ったことがない。だが今回、野球関連本を積み上げて予想もしなかった気づきを得た時、これらの言葉を想起した。いうならば、自身の専門領域ばかり深めるな中で行き詰まり、そこで陥った視野狭窄を打破するために、他領域に活路を見出すように、といったら、わかりやすいかもしれない。

例えば、オリックス (NPB) やエンジェルス (MLB) などで活躍した長谷川滋利氏が著書「適者生存」で述べているのだが、彼は現役野球選手の頃から、そしてシーズン中でも (!), ゴルフを嗜んでいたらしい。それは、ゴルフを通して、野球のために学ぶことが多かったかららしい。ゴルフでコースをまわる際、序盤でスコアが崩れても、「途中で放り投げだすわけにはいかない。どうやって集中力を保つのか・・・」という局面から、「野球も同じように、登板して打たれた後も、自分で交代するわけにはいかないから、いかに自分の気持ちをコントロールできるのかが大事」と、重要な気づきを得ているという。

この例が示すこともまた、「自分の専門領域以外から、自分の専門領域にかかわる大事な智慧を学ぶこと、学べること」と言っているのではないだろうか。

そういえば、この長谷川滋利氏、漫画が好きと公言している (詳しくは彼が著した「メジャーリーグで覚えた僕の英語勉強法」の 35 ページをご参照あれ)。そして、本稿第 4 章のテーマは漫画である。そこで、先の話の踏まえて、今回私は、「漫画の神様」といわれた手塚治虫の「火の鳥」をご紹介したい。

## 主人公からみた世界と、その主人公をみる火の鳥がみる世界

世界的に名高い手塚治虫氏の説明は省くが、正直なところ、「火の鳥」も同様に、世界的に高名である。多くの読者はよくよくご存知な方も少なくないだろうが、少しだけ、作品について触れていきたい。

「火の鳥」は、漫画のみならず、アニメ、ゲーム、映画、演劇などにマルチに取り扱われた高名な作品である。詳しいことはわからないが、昭和 29 年 (1954 年) にまず「黎明編」が発表され、以降、「エジプト編」「ギリシャ編」「ローマ編」、「黎明編 (新構成)」、「未来編」「ヤマト編」「宇宙編」「鳳凰編」「復活編」「羽衣編」「望郷編」「乱世編」、「望郷編」「乱世編」「生命編」「異形編」「太陽編」と、30 年以上続く大作である。

各作品において、それぞれ独立した主役が登場し、まったく別世界、別時代、別次元、別惑星のストーリーとして展開される。主役、つまり主人公は主に人間だが、時に非人間となることもある。そして、どの作品にも「火の鳥」という超生命体が現れ、直接的間接的に主人公たちとかかわるのである。

主人公たちは、名誉、愛情、野心、絶望、喜び、希望、平和、肉欲、貪欲、献身といっ

た、だれもがもつ何らかの感情や本能に基づく悩みや苦しみと向き合い、よくも悪くも必死に生きて、よいとも悪いといえない結末を迎える。

この作品を主人公視点で見つめると、とにかく、悲しいとか、つらいとか、むごいとか、報われないとか、あまり楽しくない感情を感じるかもしれない。しかし、そんな主人公とかかわる「火の鳥」視点で捉えると、実はまったく異なる感想を抱くことが少なくないただろう。そして読者は、どちらの視点もまた、重要であって、どちらの視点も自分のこととして初めて、この作品から得れる学びを最大化できる。少なくとも私はそう感じるのである。

先に、野球オンチの私が野球関連本を通して、普段気づけない学びを得たと語った。この感覚は、「火の鳥」の読み方と似ているような気がする。ぜひ、本稿の読者が「火の鳥」を手にとった際、どのような捉え方、感じ方をされるか、お聞かせ願いたいものである。

### 漫画を読む者の視点と、読まない者の視点もまた

もう立派な「おっさん」となった私は、子どものころと異なり、ほとんど漫画を読まない。しかしそれでも、過去の経験という財産から、漫画から学ぶことは少なくない。

そうそう、二階堂先生もまた、私とは異なる意味で、漫画をあまり読まないらしい。そんな二階堂先生に無理やりペンをとってもらえて、ありがたいやら、申し訳ないやらである。ぜひ、ご無理のない範囲で、二階堂先生のご経験なりお知恵をお借りしたい。きっとその時、漫画を読む者の視点と、(あまり)読まない者の視点の交差から生まれる、また新しい智慧があるような気がする。

—つづく—